
one-six club

葛城アモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

one-six club

【Nコード】

N5978E

【作者名】

葛城アモン

【あらすじ】

夜な夜な、如何わしいクラブでロシアンルーレットに耽る男の前に、現れた黒づくめの男の正体とは……。

俺はもうあの店、『ONE—SIX』で飲むことはない。

馬鹿げた遊びに我を忘れて、のめり込むこともない。

あの日から二度と……

※ ※ ※

檯の丸テーブルの上に置かれたリボルバーを手にとると、一発だけ弾を込め、テーブルに戻す。

その瞬間、店内のざわめきは消え、空気がわずかに冷めていく。

テーブルを挟んで座る男は、喰う、寝る、殴る以外は能の無さそうな大男で、太い指でコインを投げる。

テーブルの上でコマのように回るコインは、銃に当たり、弾かれて、表を上にして止まった。

俺が先か……、幸先がいい。

銃を手にとると、手のひらでシリンダーを一気に回し、間髪入れずにこめかみに当て、引き金をひく。

カッン……。

6分の1の確率が5分の1に変わった瞬間。店のあちこちで低い吐息が漏れる。

これだ！この感覚！この瞬間がたまらない！

相手も二発目を撃ち、石から削りだしたような強面で、ニヤリと笑う。

4分の1……。

手足の先からぞわぞわと泡立つような震えがくる。
目の筋肉が痙攣し、くちびるが乾く。そう、これ、この感覚！

俺は銃をとると、こめかみに当て、目を閉じ、息を吸い込む。
重く冷たい鉄のかたまりがギンギンに熱く感じられる。
さあ、早く引き金をひけよ！

俺はゆっくりゆっくり指先に力を込める……。

カッン！

3分の1。店内の空気が一瞬にしてほどけ、低い歓声があがった。
カウンターの隅でハイスクール上がりのガキが、スゲエスゲエと連呼している。

このゲームはどちらが撃とうと、3発目までが勝負だ。
4発目が撃てる度胸のある奴はそうはいない。

相手が銃に手を伸ばさず、それこそ石にでもなったように、戦意

喪失しているのを見てとると、俺はテーブルの上の掛け金をつかみ、何も言わず立ち上がった……。

ゲームのあとは決まってひどい憂うつに囚われる。

一ヶ月は喰えるだけの金をポケットにねじ込んで、店から数ブロック離れた自分の部屋に向かいながら、呆けたような顔でトボトボと歩いていた。

両親を幼い頃に亡くし、ずっと兄と助けあって生きてきた。数年前、俺が成人を向かえ、初めて夜明けまで飲み明かした朝、もう大人だな、頼りにしているぞ、と肩を叩いて豪快に笑った兄はもういない。

仕事中の事故、警官なんかになるから他人の身代わりに死ぬはめになるんだ。

オフクロが助けてくれるって、形見の指輪をいつも小指にしてた。そんなもの何の役にも立たなかった……。

いつの間に帰ったのか、俺は部屋の中央に突っ立ったまま、板張りの床をじっと眺めていた。膝をつき、手で触れる。拝むような姿勢で額をつける。

冷たい……。

俺は堪え切れず、そのまま横倒しに崩れると、膝を抱え声を上げて泣き出した……。

※ ※ ※

『ONE—SIX』の店内は人いきれと煙草の煙でむせ返るようだった。

ゲームのある日は、どこで聞き付けるのかいつも満員になる。

男も女も、安全な場所から、スリルと興奮の分け前を、わずかも持ち帰ろうとする輩ばかり。

この感覚は、このテーブルを前に座って初めて体感できるものだ。『死』に触れ、『死』を操ってこそその快感を、手も伸ばさず、ギラギラした目でもの欲しげに見つめるだけの羊達の群れ。

俺は相手を待っていた。

少し遅れて現れた男は、背が高く、黒ずくめでツバの広い帽子をかぶり、大きなサングラスとマスクをしていた。

どうやら身元を隠しておきたいらしい。負ければ臆病者と蔑まれ、この界限を歩けなくなる。勝負の前からその用心じゃ、はなから勝負は決まってる。

いつものように、相手がコインを投げる。

青白い手が優雅に振られ、コインはテーブルの中央で静かに回り、やがて表を上にして止まった。

俺が先か……。幸先がいい。

銀色に輝くりボルバーを手にすると、ぞわぞわと泡立つ歓喜の波が押し寄せてくる。

これだ！この感覚！

俺は手のひらでシリンダーを回し、こめかみに当て一気に引き金をひこうとしたその瞬間、冷たい手で心臓をわしづかみにされたような衝撃で、のけぞり、癲癇を起こした子供のように身体が固まった。

俺は何を見ている？

相手の男でもない。店内にいる客や、窓から見える外の景色でもない。

俺の目は、シリンダーの中にある銃弾が、ハンマーの前に装填され、発射を待っているのが、ありありと見えた。

この一発を撃てば必ず死ぬという『実感』が、ギリギリと心臓をしめつけ、息もできず、どっと汗が吹き出した。

スリルや興奮とは違う震えが全身をおおい、銃をこめかみから離そうとしても、手はますます銃口を頭に押しつけ、指が引き金をひこうとする。

たすけて……、

声にならない叫びが喉を詰まらせ、涙が頬を伝い、顎の先からしったり落ちて、太股を濡らす。

死にたくない……、

気持ちとは裏腹に、指が引き金を絞りはじめる。

たすけて……、

たすけて……、兄さん！

手はギリギリ握り締められ、ハンマーが落ちた。

カッン……。

気を失い、テーブルに突っ伏すその瞬間、黒ずくめの男が差し出した左手の小指に、金色に光る指輪を、見た気がした……。

※ ※ ※

俺はもうあの店、『ONE—SIX』で飲むことはない。

馬鹿げた遊びに我を忘れて、のめり込むこともない。

あの黒ずくめの男が誰だったが、今はもう調べる術はないけれど、あれ以来、何故か夜一人、冷たい床で泣き明かすことはなくなった。

いつか、花でも買って、家族の眠る墓を訪ねてみよう……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5978e/>

one-six club

2010年11月18日14時15分発行